

姨捨

堀辰雄

青空文庫

わが心なぐさめかねつさらしなや
をばすて山にてる月をみて

よみ人しらず

一

上総かずさの守かみだった父に伴なわれて、姉や継母などと一しよあずまに東に
下つていた少女が、京に帰つて来たのは、まだ十三の秋だった。
京には、昔むかし氣質かたぎの母が、三条の宮の西にある、父の古い屋形に、
五年の間、ひとりで留守をしていた。

そこは京の中とは思えない位、深い木立に囲まれた、昼でもな
んとなく薄暗いような処だった。夜になると、毎晩、木菟^{ずく}などが
無気味に啼^ないた。が、田舎に育った少女はそれを格別寂しいとも
思わなかった。そうして其屋形にまだ住みつきもしないうちから、
少女は母にねだっては、さまざまな草子を知辺から借りて貰った
りしていた。京へ上ったら、此世にあるだけの物語を見たいとい
うのは、田舎にいる間からの少女の願だった。が、まだしるべも
少い京では、少女の心ゆくまで、めずらしい草子を求めることも
なかなかむずかしかった。

国守までした父も、母と同様、とかく昔気質の人だったから、
京での暮らしは、思ったほど花やいだものではなかった。が、少

女はそういう父母の下で、いささかの不平も云わずに、姉などと一緒につつましい朝夕を過ごしていた。「もつと物語が見られるようになれば好い」——只、少女はそう思っていた。

その年の末、一しよに東にも下っていた継母が、なぜか、突然父の許を去つて行つた。^{もと}翌年の春には又、疫病のために氣立のやさしかつた乳母も故人になつてしまった。此頃或右馬頭^{うまのかみ}の息子がおりおり姉の許に通つてくる外には、屋形はいよいよ人けのなくなるばかりだった。が、当時何よりも少女の心をいためたのは、「これを手本になさい」と云われて少女が日毎にその御手を習いながら、人知れず物語の主人公に対するようなあくがれの心を抱いていた、侍従大納言の姫君までが、その春乳母と同じ疫病に亡

くなられてしまった事だった。「とりべ山谷に煙のもえ立たばは
かなく見えし我と知らなむ」——少女が日頃手習をしていた姫君
の美しい手跡にそんな読^{よみ}人^{びと}しらずの歌なんぞのあつたのが、い
まさら思い出されて、少女には云いようもなく悲しかった。

が、そういう云いしれぬ悲しみは、却^{かえ}つて少女の心に物語の哀
れを一層沁^しみ入^いらせるような事になった。少女はもつと物語が見
られるようにと母を責め立てていた。それだけに、其頃田舎から
上つて来た一人のおばが、源氏の五十余巻を、箱入のまま、他の
物語なども添えて、贈つてよこして呉れたときの少女の喜びよう
というものは、言葉には尽せなかつた。少女は昼はひねもす、夜
は目の醒^さめているかぎり、ともし火を近くともして几帳^{きちよう}のうち

に打ち臥しながら、そればかりを読みつづけていた。夕顔ゆうが、浮うきふね

舟、——そう云った自分の境界にちかい、美しい女達の不しあわせな運命の中に、少女は好んで自分を見出していた。いままだ自分は穉おさなくて、容貌もよくはないが、もっとおとなになったら、髪などもずっと長くなり、容貌も上がって、そういう女達のようにもなれるかも知れないなどと、そんな他愛のない考も繰り返し繰り返していたのだった。

古い池のほとりにある、大きな藤は、春ごとに花を咲かせたり散らしたりした。そのたびに、少女は乳母の亡くなったのは此頃だと悲しく思い出し、又、同じ頃亡くなった侍従大納言の姫君の手跡を取り出しては、一人であわれがったりしていた。そんな五

月の或夜、夜ふけまで姉と二人して物語など見ながら起きていると、少女の身ぢかに、猫の泣きごえらしいものが出し抜けにした。驚いて見ると、かわいい小猫が、どこから来たのか、少女の傍に來ていた。前にいた姉が「誰にも教えないで、私達だけで飼いましようよ」と云つて、傍に寝かせてやると、おとなしく寝ていた。もとの飼主がそれを捜していて、見つかりでもするといけないと思つて、二人だけでこつそりとそれを飼つてやっている、猫はもう婢^{はしため}たちの方へは寄りつきもせず、いつも二人にばかり絡みついていて、物もきたなげなのは顔をそむけて食べようとしなかつた。

一度、姉がわずらつて、何かと手が無かつたものだから、その

猫を婢たちのいる北きたおもて面にやり放しにして置いたことがあつた。

猫は、その間じゆう、北面の方で苦しそうに泣きつづけていた。

——すると、わずらっていた姉がふいと目を醒さまして、「猫はどこにいろの。こっちへよこしておくれ」と云うので、「どうかなすつて」と少女が云うと、姉はいましたが見た見た夢を話した。なんでもその猫が寝ている姉の傍らに来て、こんな事を言つたのだそうだった。

「実はわたくしは侍従大納言殿の姫君の生れ変りなのでございませう。前世からの因縁がありますのか、この中の君なかきみがわたくしの事を大そう哀れがつて思い出しますのです、只暫くの間、此処に参っておりますのに、今のように婢たちの中にばかり押し据

えられておりましては、なんともつらくてなりませぬ」——一人の品のよい、美しいお方が自分の傍で泣き泣きそんな事を云われているように思つて、驚いて目を醒ますと、それはさつきから泣きつづけている猫の声だったと云う事だった。

そんな夢の事があつてから、猫はもう北面へも出されずに、今までよりか一層姉妹に大事にかしずかれていた。一人ぎりであるときなど、よく少女はその猫を撫でながら、「おまえは大納言様のお姫君ですのね。そのうちお父う様からでも大納言様にお知らせ申すようにいたしましょうね」と云いかけてりした。すると猫も、気のせいかな、それを聞き分けでもするかのように、長泣きなどしながら、いつまでも少女の顔を見かえしていた。

夜なかに急に火事が起つて、その三条の屋形が跡かたもなく焼けてしまったのは、その春の末の事だった。その火事と共に、大納言の姫君と思われて可哀がられていた猫もゆくえ知れずになつてしまった。——ひとまず、立退いた先の屋形は、非常に狭苦しくて、木なんぞはなんにも無かった。そのかわり、隣家の生い茂った木立が目あたりに見え、何かの花の匂などが風につれてこちらまで漂つて来るにつけても、少女は昔の木立の多かつた屋形を、——又、それと一しよに焼け死んだのかも知れない猫の事などを、切ない程あざやかに蘇^{よみがえ}らせたりしていた。

或月あかりの夜、おおかたの人が寝しずまつた夜なかまで、少女は姉と一しよに起きて、その家の端近くに出て物語などしあつ

ていた。そのうち話もと絶えがちになつて、二人は黙つて空をじつと仰いでいた。

「このまま私がすうと飛び失せて、ゆくえ知れずになつてしまつたら、どうだろうか知ら」姉が出し抜けにそんな事を口にした。

少女はおそろしそうに顔を伏せた。穢い頃、死んだ乳母から聞かされた、女が一人ぎりで長いこと月に照らされていると物に憑つかれるなんぞと云う話を急に思い出したからだつた。姉はそういう少女に気がつく、わざとらしく笑いながら、何か外の事に云いまぎらわせようとした。が、少女はすっかり怯おびえ切きつて、いつまでも顔を袖にしていた。

程経て、隣りの家の前に男車らしいものの駐とまる音がした。そ

うして「荻の葉、おぎの葉」と呼ばせているのが手にとるように聞えて来た。が、隣家からは誰もそれに返事をしないらしかった。とうとう男は呼びわずらったらしく、こん度は笛をおもしろく吹き出した。

姉妹は思わず目を見合せて、ようやく明るい微笑^{ほほえみ}を交しながら、なおも息をつまらせて耳を^{そばだ}聴てていた。しかし、隣家からは^{あいかわらず}相不変、なんの返事も無いしかった。男はどうとう、笛を吹き吹き、その家の前を通り過ぎて往った。――

互に慰めもし、慰められもしたそんな一人の姉が、佗^わびしい仮住の家で、二番目の子を生んで亡くなったのは、それから間のない事だった。母なんぞがその死んだ姉の傍に往ってしまっている

間、少女はひとりで、形見に残った穉い児たちを左右に寝かしつけていた。知らぬ間に荒れた板葺いたぶきのひまから月が洩れて、乳児ちごの顔にあたり、それを無気味に青ざめさせていた。少女はふいと前の月夜の事を思い出し、その顔へ自分の袖をかけてやりながら、いま一人の穉児おさなごをひしと抱き締めて、其処にいつまでも顔を伏せていた。

二

新しい普請の出来上った三条の屋形では、古い池と共に焼け残った藤が、今年はどういうものか、例年になく見事な花をつけた。

それが一層屋形の人けの絶えたのを目立たせているような単調な日々の中で、少女は又昔のとおり、物語を見ては、夢みがちに暮らしていた。昔風の父母は、勿論、まだこの少女を誰かにめあわせようなどとは考えもしなかった。が、さすがに少女ももう大ぶおとなびては来ていた。

父が或秋の除目じもくに常陸ひたちの守かみに任ぜられた時には、女はいつか二十になっていた。女はこん度は母と共に京に居残つて、父だけが任国に下ることになった。「ことによると、もうお前達にも逢えないかも知れない」——そんな心細そうな事ばかりを云っている年老いた父を一人で旅に出すのは、勿論、女には何よりもつらかった。が、すっかりおとなになった女の身としては、父と一しよ

にそんな田舎へ下ることも出来できにく悪かった。

或風立つた日、父が京に心を残し残し常陸へ下つて往つた後、女はもう物語の事も忘れてしまったように、明け暮れ、東の山ぎわを眺めながら暮らしていた。「今頃お父う様はどこいらを旅なすつていらつしやるだろう」と、穉い頃あづま東から上つてきた遠い記憶をたど辿りながら、その佗びしい道すじの事を浮かべていると、父恋しさは一層まさるばかりだった。朝がた、東の方の黒ずんだ森から、秋の渡り鳥らしいのが一群、急に思い出したように一しよに飛び立つて、空を暗くしては山の彼方へ飛び去つて往くのなんぞを、女は何がなしいつまでも見送つていた。

晩秋の一日、女は珍らしく思い立つて、太秦うずまさへ父の無事を祈

りに、ひとりで女車に乗って出掛けた。一条へさしかかると、その途中に、物見にでも出掛けるらしい一台の立派な男車が何かを待ちでもしているように駐まっていた。女が簾みすを深く下ろさせたまま、その前を遠慮がちに通り過ぎて往つてから、暫くして気がつくと、さっきの男車らしいものが跡から見え隠れしながら附いて来ていた。女はそれを気にするように、すこし車を早めながら、太秦まで行き著ついて寺にはいつてしまうと、いつかもうその男車は見えなくなっていた。しかし、寺に数日籠こもつて、父の無事を一心になつて祈つている間も、どうかすると女にはあの立派な男車がおもかげに立つて来てならなかった。「若もしかしたら——」が、女はそんな考えを逐い退けるように、顔を振つて、ひたすら父の

無事を祈っていた。

丁度その頃、父は遠い常陸の国に、供者もわずか数人具したぎりで、神拝をして巡っていた。一行はその日の暮、一つの川を真ん中に、薄赤い穂を一面になびかせている或広々とした芒野^{すすきの}を前にしていた。その芒野の向うには又、こんもりと茂った何かの森が最後の夕日に赫^{かがや}いていた。

国守は、なぜか知ら、突然京に残した女の事を思い出していた。そうして馬に跨^{またが}ったまま、その森の方へいつまでも目を遣っていた。そのうち何処から渡って来たのか、一群の渡り鳥らしいものが、その暮れがたの森の上に急に立ち騒ぎ出した。国守は、その

鳥の群がようやくその森に落ち著いてしまうまで、空けたようにそれを見つづけていた。

三

それから五年立つた秋、父は漸つと任を果して、常陸から上つて来た。兎に角無事に任を果して来たと云うものの、父はいたいたしい程、窶やつれていた。そうしてもう、こん度の上京かぎり、官職から身を退いて、妻や女を相手に、静かに月日を送りたいと云うより外は何も考えないでいるらしかった。それ程老いお耄ほうけたように見える父は、女にはいかにも心細かった。女はもう自分の

運命が自分の力だけではどうしようもなくなつて来ている事に気がつかずにはいられなかつた。しかし、そういう境界の変化も、此女の胸深くに根を下ろしている、昔ながらの夢だけはいささかも変えることは出来なかつた。女は自分の運命が思いの外にはかなく見えて来れば来る程、一層それを頼りにし出していた。「こういう少女らしい夢を抱いたまま、埋もれてしまうのも好い」——そうさえ思つて、女は相あいかわらず不變、几帳きちようのかげに、物語ばかり見ては、はた目にはいかにも無為な日々を送っていた。

「そうやってなんにも為ずにいらつしやるよりは——」と云つて、此頃しきりに宮仕えを勧めて来る人があつた。幾らか縁故もあるその宮からも、是非女を上がらせるようにと再三云つてよこした

りした。その宮というのは、今をときめいている一の宮だった。が、昔^{むかし}氣質^{かたぎ}の父母は、何かと気苦労の多い宮仕えには反対だった。女は勿論、父母の意に背いてまで、そんな宮仕えなどに出たいとも思わなかった。しかし、人々が「此頃の若いお方はみんな宮仕えに出たがっておりますよ。そうすれば自然に運がひらけて来る事もありますからね。ともかくも、ためしにお出しになつては——」などと、なおも熱心に勧めて来るので、とうとう父母もその女の行末を案じ、宮にさし出す事に渋々納得した。これまで安らかな無為の中にばかり自分を見出していた女は、急に自分の前に何やら不安を感じながら、それでも外に為^し様^{よう}がないように人々の云うとおりになっていた。

人出入の多い宮仕えは、世間見ずの女には思いの外につらい事ばかりだった。もとより、それが物語に描いてあるようなものではない事は、女も承知していた。が、冬の夜など、御前の近くに知らない女房たちの中に伏しながら、殆どまんじりともしないでいる事が多かった。そうして女は夜もすがら、池に水鳥が寝わすらつて羽搔はがいているのを耳にしたりしていた。又、昼間、自分の局つぼねに下がっている時には、ひねもす、此頃自分の事をいかにも頼りにし切っているような老いた父の姿などを恋しく思い浮べていた。亡き姉の遺児たちも、夜は大がい自分の左右に寝かすようにしていたのに、今はどうしているだろうと気がかりになつてならない事もあつた。が、そんな人知れない思いさえ、傍から人に、

見られているかと思うと、どうも氣づまりで思うようには出来悪^{できにく}かった。

ときおり女が三条の屋形に下がって往くと、父母は炭櫃^{すびつ}に火など起して、女を待ち受けていた。「おまえがいてお呉れだった時は、人目も見え、婢^{はしため}たちも多かつたが、此頃というものは、殆ど人けが絶えて、一日じゅう人ごえもしない位だ。ほんとうに心細くって為様がない。こんな具合では、一体、おれ達はどうなるのだろうかなあ」そんな事を父は長々と女に云って聴かすのだった。御前などでは、他の女房たちの蔭に小さくなつて、殆どあるかないかにしているのに、そんな自分も里に下りるとこれ程頼もしがられるのかと思うと、そんな事を云う父のみならず、云われる自

分までが、なんだかいたわしくつてならなかった。

が、五六日立つと、女は又氣を引き立てるようにして、宮へ上がって往くのだった。

四

女の仕えていた宮が突然お亡くなりになったのをしお機会に、女は暫く宮仕えから退いて、又昔のように父母の下でつつましい朝夕を送り出していた。さすがに宮仕えをした後には、女はもう世の中が自分の思つたようなものではない事をいよいよ切実に知り出していた。かおる薫大将だの、浮舟だのが此の世にあり得よう筈がない

事もわかり過ぎる位わかつて来た。が、一方、女はそういうどうにも為様のないような詮^{あき}らめに落ち着こうとしている自分が、却^{かえ}つて昔の自分よりもふがいなく思えてならなかった。

その後も宮からは、絶えず女をお召しになつていた。亡くなられたお方の小さい御子達の相手に女の姪たちを連れて来て貰いたいと云うのだつた。女はもう自分だけなら、このまま静かに老いるのも好いと考えていた。それ程女は身も心も疲れ切つていた。しかし、漸^{ようや}くおとなびて来た姪たちの事を考えると、此子達だけは自分のようにさせたくない、折角の宮からのお召を拒みかねて、二人に附添つてはおりおり又出仕をするようになった。が、こん度は女は宮でもまるつきり新参というのでもなく、そうかと

云つて又古参という程でもないので、只なんという事なしに女房たちの中に雑^まじつて、もとの朋^{ほうばい}輩たちと氣やすく語らつてさえいれば好かつた。もう別に宮仕えだけで身を立てようなどもしていないので、外の女房たちが自分よりも上の思^{おぼしめ}召しが好かうと羨^{うらや}ましいとも思わなかつた。そうして、古参の女房からいろんな昔の知りびとの噂などを聞いては、それを淡々と聞き過していた。一方、こうして此頃のように自分がそれに即^つかず離^{はな}れずの氣もちでいられるようになってから、漸く宮仕えと云うものの趣を自分でも分かりかけて来たような氣もしないではなかつた。

或冬の暗い夜の事だつた。上では不斷経が行われていたが、丁度声のよい人々が読経する時分だといふので、一人の女房に誘わ

れるまま、女はそちらに近い戸口に往つて、そこに伏しながら、それを聴いていた。暫くそうして聴いていると、其処へ殿上人らしい男が一人、そういう二人には気がつかないように近づいて来た。

「どなただか知らないけれど、急に隠れたりなんぞするのも見ぐるしいから、このままこうして居りましょう」と、相手の女房が云うので、その傍に女もじつと伏せていた。

その男は、戸口の近くにそういう二人を認めると、前からの知合らしい一方の女房に向かつて、非常に穏かな様子で詞ことばをかけた。「いまお一人はどなたですか——」などとも問うたが、女が困つて何んとも返事をせずにも、それ以上執拗しつようには尋ねなかつ

た。そうしてそのまま二人の傍にすわりながら、そのどちらに向かつてともつかず、世の中のあわれな事どもをそれからそれへと言い出して、女達にも真面目に問いかけたりするので、女もついそれに誘われて、いつか二こと三こと詞をことば交わしていた。「まだ私の知らないこういうお方がいられたのですね——」などと珍らしそうに男は女の方を向いて云つて、いつまでも氣もち好きそうに話し込み、なかなか其処を立ち上がりそうにもなかった。

星の光さえ見えない位に真つ暗な晩で、外にはときどき時雨しぐれらしいものが、さつと木の葉にふりかかる音さえ微かにし出していた。「こういう晩もなかなか好いものですね。」男はそう云いさして、微かに木の葉にかかる時雨の音に耳を傾けながら、急に何

か考え出したように沈黙していたが、それから徐か^{しず}かにこんな事を語り出した。

「どうした訳ですか、私は今ふいと十七年ほど前の或晩の事を思い出しております。それは私が斎宮^{さいぐう}の御裳著^{もぎ}の勅使で伊勢へ下った折の事です。伊勢に下つておる間、殆ど毎日、雪に降りこめられておりました。ようやく任も果てたので、その明けがた京へ上ろうかと思つて、お暇^{いとまごい}乞^いに参上いたしますと、ただでさえいつも神々しいような御所でしたが、その折は又円融院^{えんゆういん}の御世からお仕えしていると云う、いかにも神さびた老女が居合わせて、昔の事などなつかしそうに物語り出し、しまいにはよく調べた琵琶までも聞かせてくれました。私もまだ若い身空でしたが、

何んだかこうすつかりその琵琶の音が心に沁しみみ入って、ほんとうに夜の明けるのも惜しまれた位でした。——それからというもの、私はそんな冬の夜の、雪なんぞの降っている晩には極まってその夜の事を思い出し、火桶ひおけなどかかえながらも、かならず端近くに出ては雪をながめて居ったものでした。——そんな若い時分の事もこの頃ではつい忘れがちになっておりましたのに、今、こうしてあなた達と話し込んでいますうち、その夜の事が急になつかくし思い出されて来たのです。どういう訳のものでしょうか。——そう云えば、今宵もこれ程私の心に沁しみみ入っていますので、これからはきつとこんな真暗な、ときどき打ちしぐれているような冬の夜の事も、その斎宮の雪の夜と一しよに、折々なつかしく思

い出される事でしよう。……」

男はそんな問わず語りを為はじめた時と少しも変らない静かな様子で、それを言^い畢^おえた。

男が程経て立ち去った跡、女達はそのまめいめいの物思いにふけりながら、いつまでも其処にじつと伏せていた。雨は、木の葉の上に、思い出したように寂しい音を立て続けていた。

五

こんな事があつてからも、女が何かと里居がちに、いかにも気がなさそうな折々の出仕を続けていた事には変りはなかった。が、

出仕している間は、いままでよりも一層、他の女房たちのうちのことばすくな

詞 少 になつて、一人でぼんやりと物など眺めているような事

が多かつた。しかし、何かの折にいつかの女房と一しよになりでもすると、互に話もないのにいつまでもその女房の傍にいて何か話をしていたそうにしていたり、又、相手があの時雨の夜の事をそれとなく話題に上そうとでもすると、慌ててそれを他に外らせようとしたりした。しかし、女はいつかその男が才名の高い右うだい大弁べんの殿である事などをそれとはなしに聞き出していた。――

そうやって宮に上つていても何か落ち着きを欠いている女は、里に下りて、気やすく老いた父母だけを前にしている時は、一層心も空のようにして、何か問いかけられても返事もはかばかしくな

かつたりした。そうして一向ひとむきになつて何かを堪え忍んでいるような様子が、其頃から女の上には急に目立ち出していた。

右大弁はときどき友達と酒を酌んでいる時など、ひよいとその時雨の夜の事、——それからそのとき語り合つた二人の女のうちの、はじめて逢つた方の女の事などを思い浮べがちだった。男は勿論、外にも幾たりかの女を知っていた。又、大方の女というものがどういふものであるかも知悉ちしつした積りでいた。——しかし、その時雨の夜のように、何ぶん暗かつたのでその女の様子なんぞよく見られなかつたせいもあるかも知れないが、その女といかにもさりげなく話を交していただけで、何かこう物語めいた気分の

中に引き摩^{ひず}られて行くような、胸のしめつけられる程の好い心もちのした事などはこれまでついぞ出逢ったことがなかった。何かと云えばいま一人の女房を立てて、自分はいかにも控え目にしていた、そんな内端^{うちわ}な女のそういう云い知れぬ魅力というものは何処から来るのだろうか、男は自問自答した。もう一度で好いから、あの女と二人ぎりでしめやかな物語がして見たい。私の琵琶を聞かせたらどう聞くだろうか、——此頃になくそんな若々しい事まで男は思ったりもしていた。しかし、男は何かと公儀の重い身で多忙なうちに、その女の事も次第に忘れがちになつて往つた。

——が、ときどき友達と酒でも酌んでいるような時に、思いがけずふいとその髪^{ほの}かに見たきりの女の髪^{ほの}の具合などがおもかげに立

つて来たりした、……。

その翌年の春だった。或夜、右大弁は又その一の宮に音楽のあそびに招かれて往つていた。暁がた、男は一人で庭に降り立って、ほんのりとかかったほそ織い月を仰ぎ仰ぎ、読経などをしながら、履く音つおとをしのばせてそぞろ歩きしていた。細ほそ殿どのの前には丁ちよう子うじの匂が夜気に強く漂つていた。男はそれへちよつと目をやりながら、遣戸やりどの前を通り過ぎようとした時、ふいとその半開きになつていた遣戸の内側に一人の女のいるらしいけはいを捉えた。女房の一人でも月を眺めているのだらう位に思つて、男は何の気なしにそれへ詞をかけた。内の女は暫く身じろぎもしないでいたが、漸やつ

とためらいがちに低く返事をした時、男ははじめてそれが誰であったかに気がついた。

「あなたでしたか。あの時雨の夜はかた時も忘れずになつかしく思っております」

男はわれ知らず少し上ずったような声を出した。

そうしてそのまま男は黙って返事を待っていた。遣戸の内からは、暫くすると女がこんな歌をかすかに口ずさむのが聞えて来た。「なにさまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりを」

その時その細殿の方へ履音を響かせながら、五六人の殿上人たちが男を追うようにやって来た。男はそれと殆ど同時に、遣戸の

奥へ女がすべり込んで往くけはいに気がついた。

男は殿上人たちに拉せられながら、細殿の前に漂っていた丁子の匂を気にでもするように、その方を見返りがちに、再び履音をさせながら其処を立ち去って往った。

六

女が、前の下野しもつけの守かみだった、二十も年上の男の後妻となったのは、それから程経ての事だった。

夫は年もとっていた代り、気立のやさしい男だった。その上、何もかも女の意をかなえてやろうとしていた。女も勿論、その夫

に、悪い気はしなかった。が、女のひとむき一向になつて何かを堪え忍んでいようとするような様子は、いよいよ誰の目にも明らかになるばかりだった。しかし、もう一つ、そう云う女の様子に不思議を加えて来たのは、女が一人でおりおり思い出し笑いのような寂しい笑いを浮べている事だった。——が、それがなんであるかは女の外には知るものがなかった。

夫がその秋の除目じもくに信濃の守に任ぜられると、女は自ら夫としよにその任国に下ることになった。勿論、女の年とつた父母は京に残るようにと懇願した。しかし、女は何か既に意を決した事のあるように、それにはなんとしても応じなかった。

或晩秋の日、女は夫に従つて、さすがに父母に心を残して目に

涙を溜めながら、京を離れて往った。おさな穉い頃多くの夢を小さい胸に抱いて東から上つて来たことのある逢坂の山を、女は二十年後に再び越えて往った。「私の生涯はそれでも決して空しくはなかった——」女はそんな具合に目を赫かがやかせながら、ときどき京の方を振り向いていた。

近江、美濃を過ぎて、幾日かの後には、信濃の守の一行はだんだん木深こぶかい信濃路へはいつて往った。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第6巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第二巻」筑摩書房

1977（昭和52）年8月30日初版第1刷発行

初出：「文藝春秋」

1940（昭和15）年7月号

初収単行本：「晩夏」甲鳥書林

1941（昭和16）年9月20日

※底本の親本の筑摩書房版は、甲鳥書林版による。初出情報は、

「堀辰雄全集 第二巻」筑摩書房、1977（昭和52）年8月30日、
 解題による。

※訂正注記に際しては、底本の親本を参照しました。

入力：kompass

校正：門田裕志

2003年12月29日作成

2012年4月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

姨捨

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>